



**SAITAMA
TRIENNALE
2016**
さいたまトリエンナーレ 2016

開催概要
2016年3月25日

さいたまトリエンナーレ 2016

127万もの人々が生活するさいたま市に、
世界に開かれた創造と交流の現場をつくりだすことを目指す国際芸術祭。

テーマは「未来の発見！」。

アートを鑑賞するだけでなく、共につくる、参加する芸術祭です。

まちの成り立ちや知られざる自然、土地の歴史など、
生活都市ならではの魅力が見える、市内のさまざまな場所が会場となります。

国内外のアーティストたちが発見する、多様で多彩なさいたま。
その魅力あふれるさいたまに触れ、私たちのこれからの未来を発見していきます。

CONTENTS

ごあいさつ	02
ディレクターメッセージ	03
開催概要	04
さいたまトリエンナーレ2016のコンセプト	05
アートプロジェクト[参加アーティスト]	06
▶ 与野本町駅～大宮駅周辺エリア	07 - 08
▶ 武蔵浦和駅～中浦和駅周辺エリア	09 - 11
▶ 岩槻駅周辺エリア	12 - 16
▶ その他	17 - 19
ロゴサイン／キービジュアル	20
関連事業(さいたま市実施事業)	
▶ 市民プロジェクト	21
▶ 連携プロジェクト	22
▶ その他関連事業	23
その他	24
組織	25
アクセス	26

ごあいさつ

さいたま市は、2001年5月1日、浦和市・大宮市・与野市の合併により、3市がこれまで育んできた、「文教都市浦和」、「鉄道のまち・商業都市大宮」、「芸術文化のまち与野」などの個性ある都市イメージや、「サッカー」、「うなぎ」、「盆栽」、「漫画」などの魅力ある文化を受け継いで、誕生しました。

2003年の指定都市移行、「城下町」等の歴史や「人形」等の文化を有する岩槻市との2005年の合併を経て、今や人口は127万人を超え、持続的に発展・成長し続ける大都市となつてまいりました。

そして、さいたま市は、文化芸術が持つ力を活かし、「生き生きと心豊かに暮らせる文化芸術都市」を創造するため、2012年4月1日にさいたま市文化芸術都市創造条例を施行し、盆栽、漫画、人形、鉄道などの多様な歴史文化資源や文化芸術を活用した総合的な都市づくりを進めています。

今年は、さいたま市誕生15年という節目に当たります。

その節目に、「文化芸術都市さいたま市」の創造に向けた象徴的・中核的な事業として、「さいたまトリエンナーレ2016」を開催いたします。

テーマは「未来の発見！」。

127万人を超える市民が生活する「さいたま市」を舞台に、アートのための祭典ではなく、市民がアーティストとともに、自分たちの未来を探していく、「市民の想像力の祭典」にしたい。この開催テーマには、ディレクター芹沢高志氏による強い思いが込められています。

開催テーマ「未来の発見！」のもと、国内外で先進的な活動を展開するアーティストがさいたま市を訪問・滞在し、市民と交流しながら、市内各地でさまざまなアートプロジェクトを展開します。

私たちは、「さいたまトリエンナーレ2016」の開催が、さいたま発の先進的な都市文化「さいたま文化」の創造・発信、さいたま文化を支える「人材」の育成、さらにはさいたま文化を活かした「まち」の活性化につながり、さいたま市の未来、そして世界の人々の未来を切りひらくきっかけになるものと確信しています。

「さいたまトリエンナーレ2016」に多くの皆さまのご賛同とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



さいたまトリエンナーレ実行委員会会長
清水勇人(さいたま市長)

さいたまトリエンナーレ2016が目指すところ

さいたまトリエンナーレ2016が目指すのは、2016年のさいたま市に、世界に開かれた創造と交流の現場をつくりだすことにほかなりません。

現代の日本社会は大きな転換期にあると言えるでしょう。いや、日本だけではない。

世界的にこれまでの構造が激しく揺らぎはじめ、私たちには自分たちの未来が見えにくくなってきています。だからこそ、今、私たちは想像の力を羽ばたかせ、誰かから与えられた一つの未来ではなく、自分たちが生きてゆく未来を、自分たち自身で、足元から見つめ直していくことが求められていると思うのです。

このような認識のもとに、私はさいたまトリエンナーレ2016のタイトルを「未来の発見！」としました。

現在では世界各地でビエンナーレ、トリエンナーレといった国際芸術祭が頻繁に開催されていますが、まちで展開する以上、それはまちに関わるすべての人々に開かれたものにならなければなりません。

まちとはただの建物や道路の集積ではなく、歴史や文化といった時間的な過程をも含めた、人々の営みの総体です。

その意味で、私はこのトリエンナーレを「ソフト・アーバニズム」＝「柔らかな都市計画」と考えたい。

文化、芸術を核として、まちの営みに創造性を吹き込むための社会的な実験です。

もちろん祝祭空間の創出には力を入れますが、今回トリエンナーレでは、トリエンナーレ終了後も続くような創造的の市民活動の芽をいかに多くつくりだすか、そしてその活動が持続的に展開できるような社会的な枠組みをいかにつくりだすか、そうした目には見えにくい地道な取り組みにも力を注いでいきたいと考えています。

アートは想像の力によって、現実のまた別の姿、もう一つの風景、置き去りにされた想い、消え入るような小さな叫び、ささやかな日々の喜び、思ってもいなかった可能性、そんなことを生き生きと、私たちの目の前に浮かび上がらせてくれるものです。

新たな目で過去、現在を見つめ、未来を夢見る。さいたま市は人が生きる現場であり、日本を代表する「生活都市」です。

自発的な市民活動も盛んに展開されています。いのちの未来を夢見るとき、こんなにも適切な場所はありません。

各アートプロジェクトでは、国内外で先進的な活動を展開するアーティストがさいたま市を訪れ、ここに滞在し、市民と交流し、制作のプロセスを共有して、この場所でしか構想し得ない作品をつくっていきます。

そしてここに生まれる交流と創造の現場において、市民一人ひとりがアーティストの優れた直観に触発されて、自分たちの生きていくこれからの未来を、それぞれに「発見」していくことになるのです。

さいたまトリエンナーレ2016
ディレクター 芹沢高志



芹沢高志 SERIZAWA Takashi

1951年東京生まれ。神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科を卒業後、(株)リゾナール・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。1989年にP3 art and environmentを開発。帯広競馬場で開かれたとち国際現代アート展「デメーテル」の総合ディレクター(2002年)、アサヒ・アート・フェスティバル事務局長(2003年～)、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合ディレクター(2009年、2012年、2015年)を歴任。

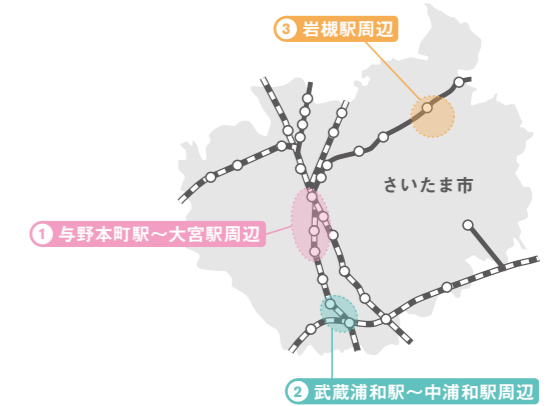
テーマ = 未来の発見!

会期 = 2016年9月24日(土)～12月11日(日) [79日間]

主な開催エリア =

- 1 与野本町駅～大宮駅周辺
- 2 武蔵浦和駅～中浦和駅周辺
- 3 岩槻駅周辺

*会期中は、主要エリアのほか、市内各地で各種アートイベントを実施予定



主催 = さいたまトリエンナーレ実行委員会

ディレクター = 芹沢高志(P3 art and environment統括ディレクター)

事業構成 =

❖ 実行委員会主催事業

アートプロジェクト

ディレクターが直轄し、展開するアートプロジェクトでは、国内外で先進的な活動を展開するアーティストがインスタレーション、映像、演劇・ダンス・パフォーマンスなどの身体表現を主な手法とするプロジェクトを、市内各地で実施していきます。

さいたまスタディーズ

2015年度に地形、地質、植生、気象、歴史、文化など多方面から、さいたま市を横断的、即地的に見渡す地域研究を行いました。「土地の理解」を深め、その成果をトリエンナーレの参加アーティストや市民に公開していきます。

❖ 関連事業(さいたま市実施事業)

市民プロジェクト

市内の文化施設を会場として、開催テーマ「未来の発見!」に沿った演劇、音楽、パフォーマンス公演やアート作品の展示を行う参加者公募型のプロジェクトを実施するほか、市内の文化芸術団体などと相互協力・連携して、プロジェクトを展開していきます。

連携プロジェクト

市内に所在する多彩な文化施設と連携を図り、共にトリエンナーレを盛り上げます。各文化施設が主催する事業を(さいたまトリエンナーレ2016連携プロジェクト)として、共催、相互PRなどを行います。

その他関連事業

トリエンナーレの開催を契機に、市内企業などの各種事業所などで生まれる創造的活動が継続的に展開できるよう、必要な支援を行っていきます。

さいたまトリエンナーレ2016のコンセプト

さいたまトリエンナーレ2016は、「ソフト・アーバニズム(柔らかな都市計画)」という概念のもと、文化、芸術を核として、まちの営みに創造性を吹き込むための実験的な取り組みとして開催します。

さいたま市の「場所性」にこだわります。

127万を超える人々が日々の生活を送るさいたま市において、それぞれ特徴の異なる3つの地域を主要エリアに設定し、場所性を生かしたプロジェクトを展開します。

中核となる〈アートプロジェクト〉では、国内外で先進的な活動を展開するアーティストたちが市内に滞在し、「未来の発見!」というテーマのもと、この場所ではしか構想し得ないプロジェクトを生み出します。



見沼たんぼとさいたま新都心

「共につくる、参加する芸術祭」を目指します。

さいたま市に生活する人々の関心を呼び起こし、市民が創造のプロセスそのものに参加できるプロジェクトを重視します。

具体的には、アーティストが作品を制作する過程で、多くの市民に取材を行ったり、さまざまな素材提供を募ったり、参加型のワークショップを開催したりするほか、市民とアーティストの協働による音楽イベントを開催するなど、市民がさまざまな方法で参加できるプロジェクトを展開し、「共につくる、参加する芸術祭」を目指します。



日比野克彦「種は船プロジェクト in さいたま」撮影:喜多直人

開催後の継続的な活動の萌芽を生み出します。

参加型のアートプロジェクトや市民プロジェクトの実施などを通じて、トリエンナーレ終了後も市民が自発的、継続的に展開する活動の芽をなるべく多く生み出します。



[HomeBase Project SAITAMA 2015]

アートプロジェクト [参加アーティスト]

〈アートプロジェクト〉の組み立て方

さいたまトリエンナーレ2016の中核となる〈アートプロジェクト〉は、次の3段階のステップを踏んで組み立てを行います。

アーティストの選出

「未来の発見!」というテーマのもと、卓越した洞察力、想像力、造形力を有し、かつ国際的に注目するアーティストを中心に選出しました。アーティストは、現地を視察した上で、隠れた関係性や気づいていなかった可能性に新たな光を当て、人それぞれが自らの生活の現場から未来を発見する際のきっかけとなるようなアートプロジェクトを構想します。

場所の選定

「生活都市」さいたまの特徴を浮かび上がらせる、それぞれ性格を異にする3つのエリアを設定し、そこでの具体的な展示サイトを選定しました。

プロジェクトの構築

アーティストとの対話を通して、それぞれのアートプロジェクトの展開場所と内容について、時間をかけて構築を行います。今回のトリエンナーレは「参加する」こと、「共につくる」ことに力点を置いています。この方針のもと、参加や協働のためのさまざまな工夫を、可能な限り取り入れていきます。

[参加アーティスト] 以下のアーティストにより、40程度のアートプロジェクトを展開します。

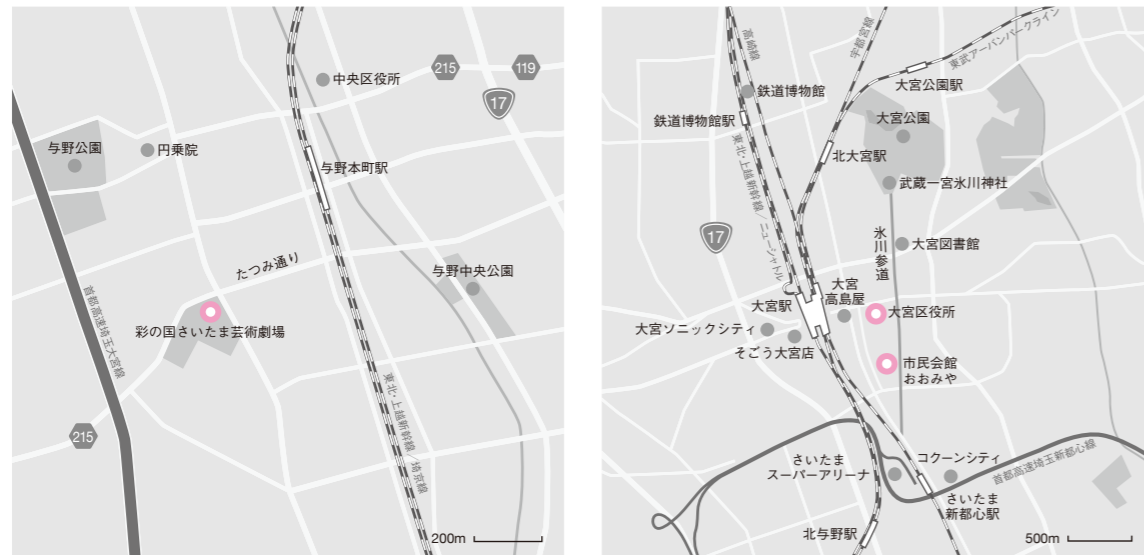
アーティスト名(和)	アーティスト名(英)	生年(創設年)	出生地(創設地)	エリア
秋山さやか	AKIYAMA Sayaka	1971	日本	● 与野本町駅~大宮駅周辺
アイガルス・ビクシェ	Aigars BIKŠE	1969	ラトビア	● 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺
チェ・ジョンファ	CHOI Jeong Hwa	1961	韓国	● 与野本町駅~大宮駅周辺、ほか
藤城光	FUJISHIRO Hikari	1974	日本	● 岩槻駅周辺
ダニエル・グェティン	Daniel GÖTTIN	1959	スイス	● 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺
日比野克彦	HIBINO Katsuhiko	1958	日本	● 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺、ほか
ホームベース・プロジェクト	HomeBase Project	2006	アメリカ	● 岩槻駅周辺、ほか
磯辺行久	ISOBE Yukihisa	1935	日本	● 与野本町駅~大宮駅周辺
日本相模間芸術作曲家協議会 JACSHA (鶴見幸代、野村誠、榎山智子)	JACSHA (TSURUMI Sachiyo, NOMURA Makoto, MOMIYAMA Tomoko)	2008	日本	● 岩槻駅周辺
川益龍三	KAWANO Ryuzo	1976	日本	● 岩槻駅周辺
オクイ・ララ	Okui LALA	1991	マレーシア	● 岩槻駅周辺
ロングフィルム・シアター★	Long Film Theatre★	2016	日本	● その他(未定も含みます)
アダム・マジヤール★	Adam MAGYAR★	1972	ハンガリー	● 岩槻駅周辺
松田正隆	MATSUDA Masataka	1962	日本	● 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺
目(南川憲二、荒神明香、増井宏文)	[Me] (MINAMIGAWA Kenji, KOJIN Haruka, MASUI Hirofumi)	2012	日本	● 岩槻駅周辺
向井山朋子	MUKAIYAMA Tomoko	非公表	日本	● その他(未定も含みます)
長島確	NAGASHIMA Kaku	1969	日本	● その他(未定も含みます)
新しい骨董(山下陽光、下道基行、影山裕樹)	NEW ANTIQUE (YAMASHITA Hikaru, SHITAMICHI Motoyuki, KAGEYAMA Yuki)	2015	日本	● その他(未定も含みます)
西尾美也	NISHIO Yoshinari	1982	日本	● 岩槻駅周辺、ほか
野口里佳	NOGUCHI Rika	1971	日本	● 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺
岡田利規	OKADA Toshiki	1973	日本	● 与野本町駅~大宮駅周辺
大洲大作	OZU Daisaku	1973	日本	● 岩槻駅周辺
大友良英	OTOMO Yoshihide	1959	日本	● 与野本町駅~大宮駅周辺
小沢剛	OZAWA Tsuyoshi	1965	日本	● 岩槻駅周辺
ウィット・ボンニミット★	Wisut PONNIMIT★	1976	タイ	● ● ● 全エリア、ほか
ソ・ミンジョン	SEO Min-Jeong	1972	韓国	● 岩槻駅周辺
SMF (Saitama Muse Forum)★	SMF (Saitama Muse Forum)★	2008	日本	● 与野本町駅~大宮駅周辺
ダンカン・スピークマン & サラ・アンダーソン★	Duncan SPEAKMAN & Sarah ANDERSON★	1976/1981	イギリス	● その他(未定も含みます)
鈴木桃子★	SUZUKI Momoko★	1982	日本	● 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺
高田安規子・政子	TAKADA Akiko & Masaako	1978	日本	● 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺
多和田葉子	TAWADA Yoko	1960	日本	● 岩槻駅周辺
マテイ・アンドラシュ・ヴォグリンチッチ	Matej Andraž VOGRINČIČ	1970	スロヴェニア	● 岩槻駅周辺
アピチャポン・ウィーラセタクン	Apichatpong WEERASETHAKUL	1970	タイ	● 岩槻駅周辺
ユン・ハンソル	YOON Hansol	1972	韓国	● その他(未定も含みます)

★マークは新規発表アーティストです。(2016年3月時点)

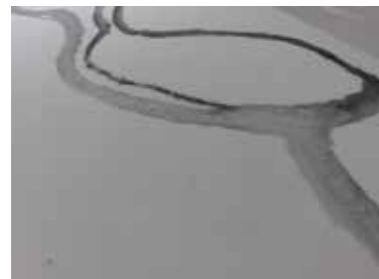
アートプロジェクト【参加アーティスト】
与野本町駅～大宮駅周辺エリア

ここはさいたま市の都市的風景を代表する大宮駅、さいたま新都心駅周辺のほか、彩の国さいたま芸術劇場など、広域的に集客できる機能があり、活力に満ち、流れる時間の速度も速い。こうした特質を考慮して、常設の会場を設けつつ、エリア全体に数々のアートイベントを時間空間的に点在させる手法を取ります。

▶主な会場
彩の国さいたま芸術劇場、
大宮区役所旧地下食堂、
市民会館おおみや旧地下食堂



秋山さやか AKIYAMA Sayaka



(2014年 11月6日朝 消化する 11月29日10時25分 上海) (部分) 2014年

▶展示(インスタレーション)

1971年、兵庫県生まれ。神奈川県在住。国内外のさまざまな土地を巡りつつ、その時の思いや出来事、出逢いなどを、色とりどりの縫い目に込めて、あるいは道のりや場所の感覚・記憶を表現する美術作家。近年の主な展覧会に「もずのはや賢」展(個展、Joshibi Art Gallery、上海、2014年)、「始発電車を待ちながら」(東京ステーションギャラリー、2012年)、「ベルリン—東京」展(ベルリン新国立美術館、2006年)、メゾンエルメス・ショウウィンドウ(2015年)、「日産アートアワード2015」(BankART Studio NYK、横浜)など。主な収蔵先に、東京都現代美術館、霧島アートの森、新潟県立近代美術館など。フィリップモリスアートアワード大賞(2000年)、公益信託タカシマヤ文化基金・タカシマヤ美術賞(2010年)受賞。

さいたま市で数ヶ月間生活し、その中での作家の体験や発見をもとに制作する。現地ですらあったあらゆる素材等を使ったり、一針一針「記憶」を縫い付けたり、じわじわ進みゆく空間作品を展開予定。

チェ・ジョンファ CHOI Jeong Hwa



▶展示(インスタレーション)

●市内各地でも展開

1961年、韓国生まれ。同在住。韓国を代表する現代アーティスト。アート・ディレクションやインテリア・デザインも手がけるなど多様な分野で国際的に活躍するチェは、日常の中から作品の着想を得て、韓国文化と密接な関係があるモチーフやまちに溢れるイメージを用いながら、ダイナミックで非日常的な作品をつくりあげ、普段は気づかない、物事の別の側面をユーモラスに浮かび上がらせる。アジア、ヨーロッパ、アメリカでの個展、グループ展参加多数。

さいたま市内で産出されるプラスチック再生ゴミキューブを用いた大型屋外作品。また、パルーン作品「Breathing Flower(呼吸する花)」を先行して市内を巡回展示する。

磯辺行久 ISOBE Yukihisa



(土石流のモニュメント) 越後妻有アートトリエンナーレ2015

▶展示(インスタレーション)

1935年、東京都生まれ。同在住。1957年、東京藝術大学美術学部卒業、アーティストとして活動の後、1965年に米国にわたり、1968年グリーン・カード(労働許可証)を取得、1972年、ペンシルベニア大学大学院修了。エコロジカル・プランニングを修めた後、M・ポール・フリードバーグ環境設計事務所、ニューヨーク市公園課などにプランナーとして勤務。1975年に(株)リジナル・プランニング・チームを設立。東京工業大学大学院、慶応大学環境情報学部、バリ大学 I、VIIなどで講師を歴任。2000年～2015年まで越後妻有アートトリエンナーレに参加、信濃川をテーマとした野外作品を発表。2007年、東京都現代美術館にて個展「サマー・ハブニング」開催。2013年、瀬戸内国際芸術祭に「潮流の中の島々」で参加。2013年、市原湖畔美術館にて個展「環境・イメージ・表現」開催。『エコロジカル・プランニングの方法と実践 I、II』(1975年、1977年、彰国社)など。

さいたま市内のまちなかに、期間限定のエアドームを設置。突如出現した巨大ドームによって、見慣れたまちの風景のなかに異空間が立ち現れる。ドームは内部に立ち入ることのできる体験型インスタレーションとなる予定。

岡田利規 OKADA Toshiki



(4つの墳墓な 駅のあるある) 2014年
東京都現代美術館における展示風景 撮影:椎木静寧

▶展示(映像インスタレーション)

1973年、横浜市生まれ。熊本市在住。演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。2005年、「三月の5日間」で第49回岸田國士戯曲賞を受賞。同年7月「クーラー」で「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2005—次代を担う振付家の発掘—」最終選考会に出場。2007年、デビュー小説集「わたしたちに許された特別な時間の終わり」を新潮社より発表し、翌年第二回大江健三郎賞受賞。2012年より、岸田國士戯曲賞の審査員を務める。2013年には初の演劇論集「遊行 変形していくための演劇論」、2014年には戯曲集「現在地」を河出書房新社より刊行。2016年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピール(ドイツ)のレパートリー作品の演出を3シーズンにわたって務めることが決定している。

さいたまオリジナルの新作テキストを書き下ろし、映像作品で発表。現代社会に生きる人々やその日常の風景を描く。

大友良英 OTOMO Yoshihide



「千住フライングオーケストラ」

▶音楽ライブなど

1959年、横浜市生まれ。東京都在住。音楽家。ギタリスト、ターンテーブル奏者、作曲家、映画音楽家、プロデューサー。10代を福島市で過ごす。即興演奏やノイズ的な作品からポップスに至るまで、世界中で多種多様な音楽をつくり続けている。さまざまな背景を持つ人々との協働による参加型プロジェクトにも力をいれており、2011年の東日本大震災を受け「プロジェクトFUKUSHIMA!」を立ち上げるなど、音楽におさまらない活動でも注目される。近年は「アンサンブルズ」と名付けたコラボレーションを軸に展示する音楽作品や特殊形態のコンサート、また、ターンテーブルを用いたインスタレーションなどにより、美術の分野においても高い評価を得ている。2012年、芸術選奨文部科学大臣賞芸術振興部門、2013年、東京ドラマアウォード特別賞、レコード大賞作曲賞ほか数多くの賞を受賞。

まちなかなどの賑わいのある場所で、聴くだけでなく参加もできるライブ演奏を予定。

SMF (Saitama Muse Forum) ★



「衣と体のせめぎあい ファイナルイベント」 2015年

▶ワークショップ

「SMFは、既成のジャンルにとらわれない自由な視点から多彩なアートプログラムを企画して、アートをめぐって多くの人がつながっていくためのプラットフォームです。SMFは、さまざまな生き方をしてきた人が集い、触れ合いながら、まだ見たことも聴いたことも経験したこともないようなモノゴトを創り出すこと、これまで見えなかったモノゴトが見えるようになること、これまでとモノゴトが違って見えるようになり、生きることが豊かになることを目指して活動しています。SMFは、埼玉県立近代美術館に事務局を置き、埼玉県内各地のミュージアムをキーステーションとし、美術、建築、音楽、文学、ダンス、パフォーマンス、地域活動など、さまざまな領域のメンバーで活動し、そのための事業を企画立案し開催します。」(活動趣意文より)

まちなかに拠点を設け、大人も子どもも参加できるワークショップやレクチャーなどを実施する「学校」を展開。多様なアーティストを講師に迎え、会場周辺のまちなかを含む、屋内外を舞台とした体験型授業を定期的に行っていく。

アートプロジェクト [参加アーティスト]
武蔵浦和駅～中浦和駅周辺エリア

居住の観点から、「生活都市」さいたまの特徴をよく表すエリアとしてここを選びました。現在も活発に住宅開発が進む武蔵浦和駅周辺からJR埼京線に沿って歩きはじめ、閑静な住宅地に入り、別所沼公園、中浦和駅に至る散策ルートを設定し、そこで数々のアートプロジェクトを展開します。人々はアートに導かれながら、武蔵浦和駅から中浦和駅まで、生活の現場を歩いていきます。特にルート中盤に位置する4棟の埼玉県旧部長第2公舎には大きく手をを入れて、アート展示と休憩のためのサイトをつくります。

▶ 主な会場
埼玉県旧部長第2公舎、
別所沼公園、
花と緑の散歩道



アイガルス・ビクシェ Aigars BIKŠE (Aigars BIKSE)



(Some good things from Latvia for some good people in far-away Japan) 越後妻有アートトリエンナーレ2006

▶ 展示(彫刻)

1969年、ラトビア・リガ生まれ。同在住。木、ブロンズ、石を素材とした彫刻作品を中心に、社会的なアイデンティティの確立や対立などを問題にするなど、場所やその土地の人々の暮らしを読み解きながら、さまざまな彫刻的なインスタレーション、アートプロジェクトを行っている。また空間デザインやオペラ、演劇など舞台芸術も数多く手がける。主な作品に、《ピンク・ハウス》(クリスタブス・グルビスとの共同プロジェクト、ヴェネチア・ビエンナーレ、ジェネレーション・ヨーロッパ館、イタリア、2005年)、《母なる地球のオフィスの1/10》(リガ中央墓地のためのクルサ通り2番地のオブジェ、ラトビア、2004年)、《ヨーロッパ的空間》(クリスタブス・グルビスと共同キュレーション、リガ国際彫刻四年祭、ラトビア、2002年～2004年)、ほか多数。

生活都市を支える「サラリーマン」をモチーフに、目で見えて楽しく、新しい視点や発見をもたらすような立体作品を展開予定。

ダニエル・グェティン Daniel GÖTTIN (Daniel GOETTIN)



(THE GO BETWEEN) 2001年
© Haus für konstruktive und konkrete Kunst, Zürich; Daniel Göttin, Basel photo: Alexander Troehler

▶ 展示(インスタレーション)

1959年、スイス生まれ。同国バーゼル在住。インスタレーションやパブリックスペースでのアート作品設置、オブジェ、絵画など多岐に渡る制作を行う。粘着テープやペイントを用い、空間の中にシンプルな線や面を存在させることで、既存の景色や空間の魅力をさらに引き出し、変容させるような作品を制作する。国内外での個展、グループ展のほか、国際アートフェアへの出展、パブリックコレクション多数。

公共空間に祝祭的な環境をつくりだす屋外作品を展開し、日常の見慣れた風景の中に新たな発見や驚きをもたらす機会を創出する。

日比野克彦 HIBINO Katsuhiko



「種は船プロジェクト in さいたま」2015年 撮影:喜多直人

▶ 展示(インスタレーション)、ワークショップ

1958年、岐阜市生まれ。東京藝術大学大学院修了。各地で地域の人々と制作を行い、社会でアートが機能する仕組みを追求。受け手の力に光を当てるアートプロジェクトを展開する。主なアートプロジェクトとして、「明後日朝顔プロジェクト」、「海底探査船美術館-昨日丸」、「アジア代表日本」など。現在、東京藝術大学先端芸術表現科教授、岐阜県美術館長。

「種は船プロジェクト」の関連展示や、イベントで種のカタチの船「TANeFUNe(タネフネ)」を航行した際の様子を収めたドキュメント映像の上映、市民参加型ワークショップを開催予定。また、「TANeFUNe」に乗船して荒川を楽しむ体験型の航行イベントも期間限定で予定している。

松田正隆 MATSUDA Masataka



「PARK CITY」2009年 撮影:丸尾隆一(YCAM)

▶ 展示(インスタレーション)、パフォーマンス

1962年、長崎県生まれ。東京都在住。マレビトの会代表。1996年「海と日傘」で岸田國士戯曲賞、1997年「月の岬」で読売演劇大賞作品賞、1998年「夏の砂の上」で読売文学賞受賞。2003年より演劇の可能性を模索する集団「マレビトの会」を結成。主な作品に「cryptograph」(2007年)、「声紋都市—父への手紙」(2009年)、写真家笹岡啓子との共同作品「PARK CITY」(2009年)、「HIROSHIMA-HAPCHEON:二つの都市をめぐる展覧会」(2010年)、「アンティゴネーへの旅の記録とその上演」(2012年)、「長崎を上演する」(2015年)などがある。

空き家となった住宅空間をほぼそのまま使い、映像やテキストなどを用いて演劇的空間をつくりあげる。

野口里佳 NOGUCHI Rika



(手と虹) 2010年

▶ 展示(写真、映像)

1971年、埼玉生まれ。2004年よりドイツ・ベルリン在住。1994年、日本大学芸術学部写真学科卒業。1995年、日本大学大学院芸術学専攻中退。大学在学中より写真作品の制作を始め、以来国内外で展覧会を中心に活動している。2002年、第52回芸術選奨文部大臣新人賞、2014年、第30回東川賞国内作家賞を受賞。主な個展に「予感」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2001年)、「飛ぶ夢を見た」(原美術館、2004年)、「光は未来に届く」(IZU PHOTO MUSEUM、2011年～2012年)など、主なグループ展に「シャルジャ・ビエンナーレ 8」(シャルジャ美術館、アラブ首長国連邦、2007年)、「第55回カーネギー・インターナショナル」(カーネギー美術館、アメリカ、2008年)、「光 松本陽子/野口里佳」(国立新美術館、2009年)、ヨコハマトリエンナーレ2011などがある。国立近代美術館、グッゲンハイム美術館、ボンビドウセンターなどに作品が収蔵されている。

生まれ育った土地であるさいたま市を、はじめて写真家として捉えた作品群を中心に、インスタレーションを展開。

鈴木桃子 SUZUKI Momoko



[Untitled Drawing Project]

▶ パフォーマンス、展示(インスタレーション)

1982年、神奈川県生まれ。東京都在住。日本、ロンドン、香港をベースに活動。鉛筆ドローイングによる観客参加型のタイムベースドパフォーマンスを展開。2009年にイギリスのセントラル・セントマーチンズ・カレッジ・オブ・アーツ、BA ファインアート4Dを卒業後、Zabludwicz Collectionによるブライズ「Future Map」にファイナリストとして選ばれ、英国を中心に活動を始める。近年のコミッションとして、「Sojourn: Momoko Suzuki&Sarah Tse」があり、香港のメディアに作品が大きく取り上げられた。

観客参加型の鉛筆によるドローイングパフォーマンス/インスタレーションを、滞在制作により展開。イメージは宇宙の壮大な生命のサイクルを表し、進化と変容を繰り返したのち、最終的に何も無い空間=「形のない宇宙」に帰るように消える。

高田安規子・政子 TAKADA Akiko & Masako



《庭園迷路》2010年

▶ 展示(インスタレーション)

共に1978年、東京都生まれ。同在住。一卵性双生児のユニットで制作活動している。身近なものに手を加えることで、モノの大きさの尺度、時間の認識に問いを投げかける作品を発表している。ロンドン大学スレード校美術学部修士課程修了後、2010年「クリテリウム 78」(水戸芸術館現代美術ギャラリー)、「BigMinis」(ボルドー現代美術館)、2013年「セカイがハンテンし、テイク」(川崎市市民ミュージアム)、2014年「MOTアニュアル2014 フラグメント—未完のはじまり」(東京都現代美術館)、2015年「燕子花と紅白梅 光琳アート 光琳と現代美術」(MOA美術館)、「春をまちながら」(十和田市現代美術館)、「線を聴く」(銀座エルメスフォーラム)に参加。

縄文海進期からのさいたま市の水脈や地勢、自然の様相などに着目した作品群を展示。

アートプロジェクト [参加アーティスト]

岩槻駅周辺エリア

岩槻駅からおよそ1.5kmのところには旧埼玉県立民俗文化センターがあります。東京都市圏外縁を走る国道16号線近くの、今は使われていない博物館跡で、時間と空間のエアポケットのような魔術的な空間です。ここを今回トリエンナーレの主要展示サイトに選び、圧倒的な非日常空間を創出します。さらに岩槻駅周辺にはアーティスト・イン・レジデンス・プロジェクトの拠点も置き、アーティストが住民と交流しながら触発を得て、作品を制作、展示していきます。

▶ 主な会場

旧埼玉県立民俗文化センター、
人形の東玉社員寮



藤城光 FUJISHIRO Hikari



《深遠なる庭園にて》2014年 © Kuniaki Murao

▶ 展示(インスタレーション)

1974年、茨城県生まれ。福島県在住。埼玉大学教養学部卒業。「トーキョーワンダーサイトゼロ号」展、スパイラル「SICF」などに参加後、ギャラリーROCKETにて個展(2010年)、3331 Arts Chiyodaでのスタジオ制作(2010年～2011年)、西宮船坂ビエンナーレ(2012年)、いわきまちなかアートフェスティバル 玄玄天(2014年、2015年)、生野ルートダージャン芸術祭(2014年)などに参加。移住したいわき市にて2011年春に震災と原発事故を体験し、ふくしまの人々の声に耳を傾けその姿や想いを残すプロジェクト「PRAY+LIFE」を開始。また、多くの分断を抱えた地域に対話の場をつくる活動「未来会議」の発起に関わっている。

東日本大震災以降、福島県にまつわるインタビューを収集・発信する「PLAY+LIFE」のインスタレーション。人々の体験や生活を象徴する音声とオブジェで構成。

ホームベース・プロジェクト HomeBase Project

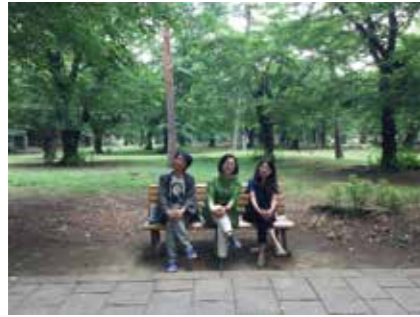


▶ アーティスト・イン・レジデンス、展示(複合)

「HomeBase Project」とは、2006年から始まった移動型国際アーティスト・イン・レジデンス・プロジェクト。現代の社会状況の変化により生まれた空き家や工場、歴史的建造物などをアーティストの「Home(家)」と見立て、一定期間の滞在制作活動を行う。これまでニューヨーク、ベルリン、エルサレムなど各開催国・地域のアーティスト、キュレーターとプロジェクトチームを編成し、過去6回にわたり実施されてきた。2015年のさいたまトリエンナーレ2016 プレイイベントでは、岩槻区を拠点に6名の国内外アーティストが滞在制作と公開プログラムを行った。

昨年に引き続き岩槻区を拠点とし、国内外、複数名のアーティストによる滞在プロジェクトを展開予定。さいたま市の歴史、風土、産業、地域の持つ課題等をリサーチし、人々との出会いの中からインスピレーションを得ながら「Home」とは何かを問い、アーティストの視点から表現を試みる。

日本相撲聞芸術作曲家協議会 JACSHA



▶ ワークショップ、パフォーマンスなど

日本相撲聞芸術作曲家協議会 (Japan Association of Composers for Sumo Hearing Arts, 略して JACSHA=ジャクシャ) とは、神事であり、芸能であり、スポーツであり、エンターテインメントであり、伝統であり、現代であり、文化であり、つまり智慧である相撲に耳を傾けること(相撲聞:すもうぶん)によって、新たな芸術を創造する作曲家の協議会。鶴見幸代、野村誠、樺山智子の3名を理事として2008年に設立。これまでに、「レッツ相撲ミュージック」(回向院)、「相撲聞芸術フォーラム」(谷中の家)、「相撲セミナー 相撲と芸術」(HAPS)、「相撲聞芸術のもくろみ」(アサヒ・アートスクエア)などを開催。

鶴見幸代 TSURUMI Sachiyo

1976年、茨城県坂東市生まれ。沖縄県在住。作曲家。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。コンサート音楽、合唱、映画音楽などを手がける。メンバーである作曲家グループ「クロノイ・プロトイ」が、佐治敬三賞受賞。鶴見幸代作品集CD「eu canto..」をリリース (fontec)。企画、参加活動に、バス旅行とコンサートのイベント「ほどバス」、願いごとが歌になるカフェ「ササノハ」、アーティスト・イン・レジデンス「はまみっくす」、エイブルアート・オンステージ「みつつのうたでドントカ」、世田谷パブリックシアター「地域の物語ワークショップ」ほか多数。野村流古典音楽保存会、琉球民謡音楽協会会員。

野村誠 NOMURA Makoto

1968年生まれ。作曲家。京大文学部卒業。小学校で相撲部に、中学校で落語研究会に所属。横浜トリエンナーレ2005では「ズーラシアの音楽」を、福岡アジア美術トリエンナーレ2009で「お湯の音楽会」を、あいちトリエンナーレ2010で「プールの音楽会」を発表。千住だじゃれ音楽祭ディレクターで、2014年に「千住の1010人」を発表し、1010人で演奏した。現在、日本センチュリー交響楽団コミュニティプログラムディレクターとして、オーケストラの新たな可能性を探求中。CDに「ノムラノピアノ」(とんつーレコード)、「瓦の音楽」(淡路島アートセンター)などがある。著書に、「音楽の未来を作曲する」(晶文社)ほか多数。

樺山智子 MOMIYAMA Tomoko

1977年、福井県生まれ、ニューヨーク/カリフォルニア育ち、東京在住の作曲家。スタンフォード大学にて作曲と文化心理学を二重専攻し卒業。文化庁新進芸術家派遣制度によりオランダ王立ハーグ音楽院作曲科留学。共同作曲作品「21世紀の子守唄」(金沢21世紀美術館)、観客参加型のツアー演劇「東京境界線紀行「なつの大罪」」(マイノリマジョリティ・トラベル)、サウンド・インスタレーション「チャンタンの高原から」(インドEarth Art芸術祭)、マルチメディア・パフォーマンス「人類が絶滅するころに」(南アフリカUnyazi 電子音楽祭)、ラジオ作品「桜の木の下で、時をみた」(フランス国立視聴覚研究所INA-GRM)など、国内外の各地で分野を横断するサイトスペシフィックなプロジェクトを展開している。

一般参加者らと相撲にまつわる音や音楽を学び、さいたま市の風景のなかで演奏する「触れ太鼓隊」の結成や、岩槻に残る民俗文化財「岩槻の古式土俵入り」をリサーチするなど、相撲の音や音楽を“聞く”音楽プロジェクトを展開。

川埜龍三 KAWANO Ryuzo



(犬島の島犬) 2013年 © Ryuzo KAWANO All rights reserved

▶ 展示(彫刻、インスタレーション)

1976年、神戸市生まれ。岡山県笠岡市在住。独学で美術制作を学び、10代の頃からジャンルや素材に囚われない多様な作品スタイルと優れた造形力を持っている。作品の世界観を再現する空間演出を得意とし、そのため自ら制作した音楽と共に作品発表も行う。インディペンデント・アーティストとして2008年に岡山県倉敷市に自身のギャラリー「ラガルト」を開設以降は常設で新旧の作品を公開しながら新しい企画や作品を生み出し続け、既存の価値観に左右されない独自の芸術活動を続けている。近年は個展での作品発表のほか、パブリックワークとして瀬戸内海を舞台に全国2千人の有志と共同制作した個人企画(犬島の島犬)(2012年)など、特定の地域の歴史を掘り起こし、象徴的な造形作品と市民を巻き込む制作プロセスでその土地に眠る伝説を可視化する手法をとっている。

さいたま市の歴史や古代の物語にインスピレーションを得た、幻想的な立体作品群を制作予定。

オクイ・ララ Okui LALA



(Let's Drink and Eat Tea!) 2015年

▶ 展示(映像インスタレーション)

1991年、マレーシア生まれ。同国ベナン島在住。写真やビデオ、インスタレーションを用いて、作品を発表。クアラルンプールにあるマルチメディア大学でメディアアートを専攻の後、さまざまなメディアを用いた作品を発表。人や地域への取材を通して作品づくりを行う。近年、子ども向けワークショップのファシリテーターとしても活動を開始。これまで、「The Good Malaysian Woman Group Exhibition」でインスタレーション作品《Sewing Sew Eng》(2014年)やベナン島ジョージタウンにて団地を使った「People's Court」プロジェクトで《It takes a decade to grow a tree, a century to shape mankind》(2014年)、ベナン州立美術館にてミャンマー移民について取材した《Let's Drink and Eat Tea!》(2015年)などを発表。

さいたま市で生きる人々を繊細かつ丁寧に取材した映像作品を発表予定。

アダム・マジャール Adam MAGYAR ★



(Array #1) 2014年

▶ 展示(映像インスタレーション)

1972年、ハンガリー生まれ、ドイツ、ベルリン在住。ハイテクな都市に魅了され、都市環境における日常を映し出す作品を制作する彼の活動は、テクノロジーとクリエイティブな欲求という二つの要素によって成り立つ。世界規模の大都市に生きるものたちがつくりだす、エンドレスな時間の流れに強い関心を寄せ、多様な人々が別々の時間を生きている様子を、一つのアングルの中でとらえることを目指している。作品は、ニューヨーク公共図書館や、ヒューストン美術館、香港文化博物館、ビドウェル・コレクションにコレクションとして収蔵されている。

まちなかや駅周辺など、公共空間を行き交う人々を独自の手法により撮影・編集し、映像・音響作品として展示。

目 [Mé]



「たよりない現実、この世界の在りか」2014年 資生堂ギャラリー photo:Ken KATO

▶ 展示(インスタレーション)

個々のクリエイティビティを特性化し、連携を重視するチームによる芸術活動。中心メンバーは、ディレクターの南川憲二、アーティストの荒神明香、制作統括の増井宏文の3名。果てしなく不確かなこの世界の可能性を信じ、その先に鑑賞者の実感を引き寄せようとする作品を展開している。代表作に「状況の配列」(三菱地所アルティアム、2014年)、「たよりない現実、この世界の在りか」(資生堂ギャラリー東京、2014年)《おじさんの顔が空に浮かぶ日》(宇都宮美術館館外プロジェクト2014)。

南川憲二 MINAMIGAWA Kenji

1979年、大阪府生まれ。埼玉県在住。ディレクター。2009年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。アート作品のアイデアを一般募集し参加者と実現に移す表現活動wah document(わうどきゅめんと)を立ち上げ、各地で活動を展開。

荒神明香 KOJIN Haruka

1983年、広島県生まれ。埼玉県在住。アーティスト。2009年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。アメリカ、ブラジルなど、国内外で作品を発表。日常の風景から直感的に抽出した「異空間」を美術館などの展示空間内で現象として再構築するインスタレーション作品を展開。瀬戸内国際芸術祭、犬島にて常設展示中。

増井宏文 MASUI Hirofumi

1980年、滋賀県生まれ。埼玉県在住。制作統括。2008年、佛教学部教育学部資格課程修了。2009年～2014年、京都造形芸術大学非常勤講師。wah document運営メンバーとして活動。多数の現場づくりや、ワークショップファシリテーション、幅広い制作活動を行う。

鑑賞者が、自身が宇宙の中に存在していること不思議を感じ、既視感を覚えるような大がかりな屋外インスタレーションを予定。

西尾美也 NISHIO Yoshinari



《人間の家「スカウト」》2014年 photo: Koji Shimamura

▶ 展示(インスタレーション)、ワークショップ

1982年、奈良県生まれ。同在住。2011年、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員(ケニア共和国ナイロビ)などを経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営のほか、ファッションブランドFORM ON WORDSも手がける。主な個展に、京都服飾文化研究財団KCIギャラリー(2006年)、3331ギャラリー(2011年)など。主なグループ展に、「Media City Seoul」(ソウル市立美術館、2006年)、「日常の喜び」(水戸芸術館、2008年)、越後妻有アートトリエンナーレ2009、Biennale Benin(ベナン、2012年)、「LIFE by MEDIA」(YCAM、2013年)、六本木アートナイト2014、「拡張するファッション」(水戸芸術館、2014年)、「服の記憶」(アーツ前橋、2014年)、「Invisible Energy」(ST PAUL St Gallery、ニュージーランド、2015年)など。

生活をしていく上での日常的な行為としての洗濯をテーマとするプロジェクト。洗濯にまつわる一連の行為をクリエイティブに捉え直すワークショップを展開すると同時に、ワークショップの記録や洗濯行為を再構成した展示を計画。

大洲大作 OOZU Daisaku



© Daisaku OOZU

▶ 展示(写真、映像インスタレーション)

1973年、大阪市生まれ。横浜市在住。写真をメディウムとし、風景に人の営みを見る。見慣れた通勤の車窓や旅先で寄り添う車窓にうつろい滲む、営みをうつす風景に光と影を見出す《光のシークエンス》、また《Afterglow》などの作品を制作している。主な展覧会に、「Afterglow」(個展、POETIC SCAPE、2016年)、「Fly me to the AOMORI 青い森へ連れてって」(青森県立美術館、2015年)、「光路 - Optical Path-」(サイギャラリー、2015年)、「光のシークエンス」(個展、ギャラリー・バルク、2014年)、「始発電車を待ちながら」(東京ステーションギャラリー、2012年)、など。主なイベントに「SlideShowStudies vol.4」(企画:平田剛志、2015年)、「フィールドワーク・セッション #1 大洲大作」(企画:松田法子、2014年)など。

さいたま市に暮らす人が日々接する通勤電車、その車窓にうつる光と影、営みと風景から発見し、構成するインスタレーション作品のほか、寄せられる市民の声を反映してゆく写真作品を展開予定。

小沢剛 OZAWA Tsuyoshi



《あなたが誰かを好きになように、誰もが誰かを好き》撮影:青木兼治

▶ 展示(インスタレーション)

1965年、東京都生まれ。埼玉県在住。美術家。東京藝術大学在学中から、風景の中に自作の地蔵を建立し、写真に収める《地蔵建立》開始。1993年から牛乳箱を用いた超小型移動式ギャラリー《なすび画廊》や《相談芸術》を開始。1999年には日本美術史の名作を醤油でリメイクした《醤油画資料館》、2001年より女性が野菜で出来た武器を持つポートレート写真のシリーズ《ベジタブル・ウェポン》を制作。2004年に個展「同時に答えろYesとNo!!」(森美術館)、2009年に個展「透明ランナーは走りつづける」(広島市現代美術館)を開催。2012年より東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授。

歴史上の実在する人物を題材に、事実とフィクションを重ねあわせて物語を構築するインスタレーション「帰ってきた」シリーズのさいたま版。アジアと国内に取材した新作を発表。

ソ・ミンジョン SEO Min-Jeong



《Sum in a Point of Time - Existence》Espace Louis Vuitton Tokyo Work with the support of Espace Louis Vuitton Tokyo © LOUIS VUITTON / Jérémie Souteyrat

▶ 展示(インスタレーション)

1972年、韓国・釜山生まれ。ドイツ・ベルリン在住。ソウルの弘益大学と東京の多摩美術大学大学院で版画を学んだ後、2003年から2008年までドイツのシュトゥットガルト州立アカデミーで美術を学ぶ。母国である韓国に加え、日本、ドイツでの学びや経験を通して多文化的で普遍的な視点をあわせ持ち、版画や陶芸、ファインアートの分野における豊富な知識を活かし、多様な素材を用いて、ドローイング、映像、写真や彫刻から立体作品、インスタレーションに至るさまざまな媒体の作品制作を行っている。2014年にはエスパス・ルイヴィトンにてオープンアトリ形式での展覧会「IN SITU - 1」を開催。

氷川神社境内で撮影した素材を用いた映像インスタレーション。

多和田葉子 TAWADA Yoko



▶ 展示(インスタレーション)

1960年、東京都中野区生まれ。1982年よりドイツ在住。都立立川高校、早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業。チューリッヒ大学博士課程修了。1993年、「犬猫入り」で芥川賞、2003年、「容疑者の夜行列車」で谷崎潤一郎賞受賞。ドイツ語で書いた作品が1996年、シャミッソー賞、2005年、ゲーテ・メダル受賞。著作はフランス語訳5冊、英訳4冊のほかにも、アジア、ヨーロッパの多くの言語に訳されている。また20か国以上で総計800回以上の朗読会及びパフォーマンスを行っている。

社会や多言語の狭間に起こる差異に注目し、数多くの小説や文章を生み出してきた多和田が、トリエンナーレのテーマや展示空間に着想を得てテキストを執筆・編集。会場空間でテキストと出会う読書体験を提供する。

マテイ・アンドラシュ・ヴォグリッチ Matej Andraž VOGRINČIČ (Matej Andraž VOGRINCIC)



《Moon Plain》2002年 オーストラリア

▶ 展示(インスタレーション)

1970年、スロヴェニア・リュブリャナ生まれ。同在住。1990年代初めから、都市や自然環境の中でサイトスペシフィックな作品制作を行う。普段は見過ごされがちでありふれた場所をさらにありふれた素材で埋めつくすという手法で、それぞれの地域や伝統、歴史の特有性を視覚化し、国際的な評価を得てきた。地域のコミュニティとの直接的なやりとりから作品制作を行う。主な作品発表は、1999年ヴェネチア・ビエンナーレ、2006年リヴァプール・ビエンナーレ、2010年中国上海万国博覧会スロヴェニアパヴィリオンなど。

日常的に見慣れた、ありふれたオブジェクトを大量に用いる屋外インスタレーションを予定。

アピチャポン・ウィーラセタクン Apichatpong WEERASETHAKUL



Stills from 《For Tomorrow and For Tonight》 Courtesy of Kick the Machine Films

▶ 展示(映像インスタレーション)

1970年、タイ・バンコク生まれ。同国チェンマイ在住。母国で建築を学び、シカゴ美術館附属シカゴ美術学校で映画制作の修士課程修了。後に同校より名誉博士号授与。1990年代より美術と映画の両分野で活動。個人の記憶と社会の記録を交錯させたアートを各地で発表。2010年監督作「ブンミおじさんの森」がカンヌ国際映画祭パルムドール(最高賞)受賞。日本とのつながりも深く、2013年福岡アジア文化賞受賞。2014年、京都市立芸術大学ギャラリーで大規模な個展を開催。2016年には新作映画「光りの墓」公開と美術展での発表を控える。埼玉県では2007年SKIPシティ映像ホールで特集上映が行われている。

さいたま市の風景や音からインスピレーションを得て、見慣れたはずの日常風景を全く違う姿で捉え直す「夢見」をし、それらを素材とした映像作品を展開する。

アートプロジェクト [参加アーティスト]

その他
(エリア未定も含まれます)

ロングフィルム・シアター Long Film Theatre ★



「ハッピーアワー」© 2015 神戸ワークショップシネマプロジェクト

さいたまトリエンナーレ2016のために開催される、映画上映のプロジェクト。生活都市さいたままでみつける、私たちの未来—それは、今ここにある私たちの「生活」が重要な出発点となる。ロングフィルム・シアターは、普段上映の機会が少ない長尺映画に光を当てる。トリエンナーレのテーマは「未来の発見!」。そして、「未来」を考える基盤となる「生活」をキーワードに、厳選した長尺作品を上映する。私たちは、日常において何をよりどころとし、何を故郷としているのだろうか。人々が内に秘めている生命力を、多様な作品を通して見つめ直していく。日々(時間)に追われ、映画館の暗闇に浸ることさえも少なくなった昨今。喧嘩から離れ、丁寧に繊細に紡ぎ出されていくスクリーンの中の(日常)を追究してほしい。ロングフィルム・シアターは、その「時」をつくり出していく。

会期中の週末に3クールにわたって実施予定。上映作品として、「ハッピーアワー」(濱口竜介監督/2015年/317分)などを予定。上映会終了後、トークイベントなども検討中。

▶ 映画上映

向井山朋子 MUKAIYAMA Tomoko



(Multus #2) 2014年 撮影:相模友士郎

和歌山県生まれ。オランダ・アムステルダム在住。ピアニスト・美術家。1991年にオランダの国際ガウデアムス演奏家コンクールで優勝して以来、ピアニストとして、国際的に活動するオーケストラなどと共演するほか、映画監督、デザイナー、建築家、写真家、振付家らとのコラボレーションを行う。近年は美術家としても活動。《for you》(横浜トリエンナーレ2005)、《you and bach》(シドニー・ビエンナーレ、2006年)、《wasted》(越後妻有アートトリエンナーレ2009)、《Nocturne(夜想曲)》(瀬戸内国際芸術祭2013)、《Falling》(あいちトリエンナーレ2013)などでインスタレーション作品を発表。近年の日本での発表作品はコンサートシリーズ《Multus》(2011年~2013年)やダンス作品《シロクロ》など。2007年、向井山朋子財団をオランダに設立。2015年には日本で一般社団法人O+(マルタス)を設立し、プロデュースの分野でも活躍。音楽のみならず美術、建築、ファッション、ダンス、写真など幅広い分野とのコラボレーションで独創性を発揮している。

「家(Home)」をテーマにしたインスタレーション作品を発表。空き家を舞台に、人々にとっての「家」の記憶を呼び起こす作品を展開。

▶ 展示(インスタレーション)、パフォーマンス

長島 確 NAGASHIMA Kaku



(豊島区在住アトリエの家) 2011年 撮影:富田了平

1969年、東京都生まれ。同在住。日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、さまざまな演出家・振付家の作品に参加。近年は演劇の発想やノウハウを劇場外へ持ち出すことに興味をもち、アートプロジェクトにも積極的に関わる。今回は佐藤慎也(日大建築)、藤谷香子(FAIFAI)、宮武亜季(居間 theater)らとチームを組んで参加。ミクストメディア・プロダクト代表、中野成樹+フランケンス所属。最近の参加プロジェクトに、「アトリエの家」シリーズ、「長島確のつくりかた研究所:だれかのみたゆめ」(東京アートポイント計画)、「四谷雑談集+四家の怪談」(中野成樹演出、F/T13)、「羅生門」藪の中」(坂田ゆかり演出、F/T14)、「ザ・ワールド」(大橋可也&ダンサーズ)、「おばけ教室」(ソトフラ、としまアート夏まつり)ほか。

さいたま市に暮らす人々とともに、来場者がそれぞれの生活の物語や日常の風景を追究するような作品を予定。

▶ 展示など

新しい骨董 NEW ANTIQUE



(裏輪呑み) 2015年

▶ 未定(ワークショップもしくはパフォーマンス)

東京、長崎、名古屋など、異なる土地で活動するメンバーが、まちやネットに溢れる「新しい骨董」とでもいべき何かを探索し、語りあうバーチャルな実験室。その活動はHP上で逐次更新されている。

山下 陽光

YAMASHITA Hikaru

1977年、長崎県生まれ。同県大村市在住。高円寺の古着屋「素人の乱シランプリ」元店主。「途中でやめる」という名前前の服を発表するかわら、戦後原爆ドームの前に出来たアトム書房の調査など、インターネットに転がるユニークな情報を探り、現代に接続するさまざまな活動を行っている。

下道 基行

SHITAMICHI Motoyuki

1978年、岡山県生まれ。名古屋在住。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。写真や文章を表現手段に、モノ／コトの残り方／消え方や、目の前に広がる風景の在り方に興味を持ち、旅やフィールドワークをベースに、数多くの展示や出版などで表現を続けている。

影山 裕樹

KAGEYAMA Yuki

1982年、東京都生まれ。豊島区在住。雑誌編集部、出版社勤務後フリーに。数々のアート&カルチャー書の出版プロデュース・編集を行うかわら、近年は各地の芸術祭やアートプロジェクトに編集者として関わっている。著書に「大人が作る秘密基地」など。

本テーマ「未来の発見!」にもとづき、過去と現在を独自の視点でつなぎ、参加者とのインタラクティブな関係性をつくり、それぞれが自身の「発見」を可能にするきっかけを促すプロジェクトを行う。

ウィスット・ボンニミット Wisut PONNIMIT ★



1976年、タイ・バンコク生まれ。愛称はタム。1998年バンコクでマンガ家としてデビュー。2003年から2006年神戸在住の後、現在バンコクを拠点に作品制作中。「مامアン」シリーズ、『ブランコ』(小学館)、『ヒーシーイット』(ナナロク社)などマンガ作品多数。横浜トリエンナーレ2005に参加。2009年『ヒーシーイットアクア』が文化庁メディア芸術祭マンガ部門奨励賞受賞。2015年バンコクで個展「MELO HOUSE」を開催。アニメーションや音楽制作も行い、音楽作品に原田郁子との共作「Baan」(2013年)がある。

作家によるキャラクターのمامアンちゃんのイラストを随所に展開。各展示会場をつなぐサインとして機能する。

▶ 展示(イラスト)、サイン ▶ 市内各地で展開

ダンカン・スピークマン & サラ・アンダーソン Duncan SPEAKMAN & Sarah ANDERSON ★



(GUANGZHOU - Sitting-Still-Moving) 2015年

▶ パフォーマンス(観客参加型)

ダンカン・スピークマンとサラ・アンダーソンは、2008年に共同制作を開始し、最近ではアーティストコレクティブの「Circumstance」の共同ディレクターを2人で務めている。彼らが扱う題材は、音楽、モバイル技術、公共空間の政治性、経験の語り等多岐にわたり、メランコリーとロマンスに満ちた作品づくりを得意とする。

ダンカン・スピークマン

Duncan SPEAKMAN

1976年、イギリス・ブリストル生まれ。リパブル舞台芸術研究所(LIPA)で音響技師としてのトレーニングを受け、その後はドキュメンタリー映像作家として活動。2005年以降は、音楽や最新技術を駆使しながら、人々がいかに社会的あるいは身体的な環境をつくりあげていくのかを問うパフォーマンス作品を、自由な公共スペースを舞台に制作している。西イングランド大学でメディア実践の講師として教鞭をとるほか、オランダのデン・ハーグ王立芸術大学のアート・サイエンス・プログラムではゲスト講師も務める。

サラ・アンダーソン

Sarah ANDERSON

1981年、イギリス・ロンドン生まれ。作曲家であり、またバイオリン、ヴィオラ、声楽を専門とするマルチ・インストルメンタリスト。演奏家として国際的に活躍するほか、映画や舞台へのサウンドトラック提供、実験音楽の制作と、その活動は多岐に渡る。現在までに、ジャービス・コッカー、DJフレッシュ、ボニンゲン、ジュリー・スリック、ブライアン・イーノ、デーモン・アルバーンら、名だたるアーティストたちと共演、もしくはアレンジを担当し、さらには現在はクローム・フーフという実験音楽グループの作曲家兼リード・ギタリストを務めるほか、バス・ヤンやディープ・スロート・クワイヤーとの共同制作、そしてロンドン・エレクトロニック・オーケストラをリード奏者として率いている。

参加者がヘッドフォンを通してまちの風景に紐づけられた音や音楽を聞くサウンドインスタレーション作品を予定。目の前にあるまちや日常と、音によるフィクションを交差させることで、新しいアート体験を提供する。

ユン・ハンソル YOON Hansol



1972年、韓国生まれ。同国在住。コロンビア大学大学院で演劇を学ぶ。2006年からグリーンピグの芸術監督を務める。2007年、「私は嬉しい」で文芸振興基金新人アーティストに選定される。2010年にはソウル・マージナル・シアター・フェスティバルにおいて「ステップメモリーズ—抑圧されたものの帰還」を発表。同じく2010年に発表した「人は人に狼」で国立劇場フェスティバルの優秀演劇に選ばれるなど、近年、韓国で最も動向が注目される演出家の一人。2013年、シークレット・フレンドにて「イヤ・オブ・ヤング・シアター・アーティスト」を受賞。2015年、京都芸術センターで「国家」を発表。現在、檀國(ダンクク)大学校教授。

▶ 演劇パフォーマンス

社会的な題材を取り扱い、数多くの話題作を発表しているユン・ハンソル。東武鉄道の協力を得て、この地ならではの場所性・環境を生かした演劇作品を発表予定。

ロゴサイン / キービジュアル

ロゴサイン

デザイナー

中島英樹 NAKAJIMA Hideki

◆ デザインコンセプト

広大な関東平野、澄み渡る空の広がり、豊かな水、さいたま市の多様な魅力を彩りにたとえて表現しています。

トリエンナーレのコンセプトである「未来の発見!」につながるよう、無限の広がりを持つ空や水を表す青をベースにしました。

角度を付けた長方形はさいたま市の形を、両端の青の線はさいたま市の河川を想起させます。



SAITAMA
TRIENNALE
2016
さいたまトリエンナーレ 2016

キービジュアル

写真家

野口里佳 NOGUCHI Rika

◆ アーティストコメント

20歳になる頃までさいたま市の見沼区で育った私にとって、見沼田んぼは世界の中心のような場所でした。どこに出かけて行っても、必ず帰ってくるところでした。どんなさりげない場所も、そこにいる人にとっては世界の中心のような大切な場所だと思います。いつも見ているのに当たり前すぎて気がつかない、そんな美しさを撮りたいと思います。そしてその写真によって、今いるこの世界の豊かさを感じられる、そんな作品をつくりたいと思っています。

◆ ディレクターコメント

この写真を見れば一目瞭然だが、野口里佳の手にかかると、なんでもない風景が見たこともない神秘性を露わにし、忽然と輝きはじめる。これこそ、私がアートに求める力そのものであり、魔術的と言ってもいい。

ベルリン在住の野口里佳は生まれ育ったさいたまの土地を新たな目で見つめる。これはさいたま市を流れるたくさんの川のうちの一本、芝川だ。川はいつもそこにあり、こんな瞬間があることさえ、多く人は気づかない。静寂と予感に満ちた一瞬の表情。これに気づくことこそ、私が想う「未来の発見!」に他ならない。私は迷うことなく、さいたまトリエンナーレ2016の精神を最も象徴する一枚として、この写真をキービジュアルとして選んだ。



関連事業(さいたま市実施事業)

〈市民プロジェクト〉

❖ 公募型市民プロジェクト

市内の文化施設などを会場として、開催テーマ「未来の発見!」に沿った演劇、音楽、パフォーマンス公演やアート作品の展示を行うプロジェクトを実施します。参加希望者・団体を広く公募し、実行委員会を形成したうえで、公演・展示プログラムを企画・実施するという、市民の皆さまによる手づくりのプロジェクトです。今後、参加者を募集し、各施設において実行委員会設置、企画検討を進める予定です。

会場	ジャンル	開催日
ブラザイースト	展示	10月18日(火)~23日(日)
	演劇	10月22日(土)
ブラザウエスト	展示	10月25日(火)~30日(日)
	音楽	10月29日(土)、30日(日)
市民会館おおみや	パフォーマンス	11月3日(木・祝)、13日(日)
市民会館いわつき	音楽	11月5日(土)、6日(日)
さいたま市文化センター	展示	11月8日(火)~13日(日)
与野本町コミュニティセンター	パフォーマンス	11月12日(土)、13日(日)

❖ 市内の文化芸術団体による文化事業

市内の文化芸術団体が共催事業を行います。

文化芸術団体	開催日	会場	内容
さいたま市美術家協会	10月10日(月・祝)~24日(月)	埼玉県立近代美術館	さいたま市ゆかりの美術家を一堂に会した初の展覧会
さいたま市文化協会	12月1日(木)~12月4日(日)	プラザノース	さいたま市文化協会加盟団体による公演・展示

❖ アート・ワークショップ フェスティバル (9月下旬~12月上旬)

市内の文化施設などにおいて、気軽にアート作品制作などを楽しめるワークショップを多数開催します。

❖ パートナーシップロゴ事業

トリエンナーレの開催趣旨に賛同して文化芸術に関連したイベントを実施する方、広報・PRにご協力いただける方などと、パートナーシップロゴを通じて、主に広報面で協力・連携を図って行きます。

私たちはさいたまトリエンナーレ2016を応援しています
We support SAITAMA TRIENNALE 2016



SAITAMA
TRIENNALE
2016
さいたまトリエンナーレ2016

〈連携プロジェクト〉

❖ 市内文化施設などとの連携

さいたまトリエンナーレ2016の開催趣旨に沿った、市内の多彩な文化施設などが主催する事業を〈さいたまトリエンナーレ2016連携プロジェクト〉として、共催、相互PRなどを行います。

文化施設	概要
埼玉県立近代美術館	<p>「ニュー・ヴィジョン・サイタマ V」▶ 9月17日(土)~11月14日(月)</p> <p>現在活躍中の埼玉ゆかりのアーティストに焦点をあてるシリーズ企画「ニュー・ヴィジョン・サイタマ」の第5回。80年代生まれの若手作家7名の近作や新作で構成します。自らの身体を経由して外界に触れ、その経験や感覚をそれぞれのメディアやスタイルで表現するアーティストたち。彼らの作品を通じて、同時代の感性と美術のこれからを展望します。</p>
彩の国さいたま芸術劇場	<p>「1万人のゴールド・シアター2016」▶ 12月7日(水)</p> <p>前代未聞のプロジェクト、高齢者による大群集劇「1万人のゴールド・シアター2016」。出演するのは一般公募の65歳以上の高齢者たち。総合演出は蜷川幸雄氏。「老人の夢」をテーマに年齢を重ねた豊かな人生経験がさいたまスーパーアリーナに弾ける、埼玉から世界に発信する大群集劇にご期待ください。</p>
鉄道博物館	<p>「(仮題)鉄道ジオラマ製作ワークショップ~鉄道模型で未来の街づくり」</p> <p>未来の街をつくり、その中で鉄道を走らせるジオラマ制作ワークショップ。モノを作る楽しさと、街と鉄道の関わりにも思いをはせます。最後にみんなでつくった街を鉄道が走る姿は感動です。</p>
うらわ美術館	<p>「(仮題)未来の発見の仕方:フルクサスの場合」展 ▶ 9月6日(火)~25日(日)</p> <p>当館の収集方針「本をめぐるアート」として収集されている〈フルクサス〉の作品を通して、「未来の発見」の仕方をたどります。「流れる、変化する」を意味する〈フルクサス〉は、ジョージ・マチューナスを中心として、1960年代にアメリカ、ヨーロッパにおいて展開した芸術活動です。日本人を含む多国籍なメンバーが、美術、音楽、詩、パフォーマンスなどそれぞれのスタイルで表現活動を行いアートの未来を切り拓きました。この展覧会で未来の発見のヒントを見つけてみませんか。</p>
大宮盆栽美術館	<p>企画展「第17回 彩展」▶ 11月25日(金)~12月7日(水) (予定)</p> <p>「彩展」は、さいたま市を中心とした地域において、地域に根差した盆栽文化の振興を図るため実施されてきた展覧会です。前後期で展示替えがあるほか、ギャラリートークも予定しています。[前期]11月25日(金)~30日(水) [後期]12月2日(金)~7日(水)</p>
さいたま市文化センター	<p>「タケカワユキヒデ コンサート」▶ 12月11日(日)</p> <p>タケカワユキヒデ氏による音楽コンサートを行いながらトリエンナーレを振り返ります。</p>

* その他の施設においても開催予定

その他関連事業

トリエンナーレの開催を契機に、市内企業などの各種事業所などで生まれる創造的活動が継続的に展開できるよう、必要な支援を行っていきます。
また、トリエンナーレの開催機運を高めるため、さまざまな団体などが実施する事業と連携を図り、共にトリエンナーレを盛り上げます。

【例】

大学コンソーシアムさいたまとの連携による トリエンナーレガイドの発行

さいたま市内及び近隣の12大学が加盟する大学コンソーシアムさいたまとの連携により、学生記者によるトリエンナーレの見どころや作品解説、開催エリア散策ガイドを盛り込んだ情報誌(トリエンナーレガイド)を製作・発行します。

その他

鑑賞料(アートプロジェクト)

「共につくる、参加する芸術祭」として、たくさんの方に鑑賞していただくとともに、一緒にアートプロジェクトをつくり、参加していただくため、
(アートプロジェクト)の鑑賞料は、原則無料とします。
(パフォーマンス公演など一部プロジェクトについては、有料のものがああります。)

サポーター

さいたまトリエンナーレ2016を支えるサポーターを募集しています。多様な活動メニューを用意しています。
主な活動内容 … 芸術祭の運営、通訳、案内ガイド、アーティストの作品制作補助、広報活動、イベント企画・運営など

ぼらたま(ボランティアさいたまWEB)で登録することができます。

ぼらたま <http://volunteercity-saitama.jp/triennale>

さいたまアートステーション

さいたまトリエンナーレ2016の最新情報を発信しています。
また、アーティストによるトークイベントやさまざまなサポーターイベントも開催しています。

[住所] さいたま市浦和区高砂2-8-9 ナカギンザビル

[開館時間] 13:00~19:00(2016年3月現在)

[開館日] 火曜日・金曜日・日曜日(2016年3月現在)

クラウドファンディング(ふるさと応援寄附)

「ふるさと納税(寄附)」を活用したクラウドファンディングを通じて、
さいたまトリエンナーレ2016を応援することができます。
ふるさと納税ポータルサイト「ふるさとチョイス」から、簡単な手続きでお申込みできます。

ふるさとチョイス <http://www.furusato-tax.jp/gcf>

組織

さいたまトリエンナーレ実行委員会

顧問

上田清司(埼玉県知事)

会長

清水勇人(さいたま市長)

副会長

桶本大輔(さいたま市議会議長)、佐伯銅兵(さいたま商工会議所会頭)、
清水志摩子(公益社団法人さいたま観光国際協会会長)、遠藤秀一(さいたま市副市長)

監事

橋本真一(関東信越税理士会浦和支部理事・税理士)、田中洋一(さいたま市会計管理者)

委員

埼玉県立近代美術館館長、独立行政法人国際交流基金理事、日本政府観光局(JNTO)理事、国立大学法人埼玉大学教育学部准教授、公益財団法人東日本鉄道文化財団鉄道博物館館長、国立大学法人埼玉大学長、芝浦工業大学システム理工学部教授、聖学院大学学長、さいたま市議会文化振興議員連盟会長、さいたま市自治会連合会会長、一般社団法人埼玉県商工会議所連合会会長、埼玉県商工会連合会会長、埼玉県中小企業団体中央会会長、一般社団法人埼玉県経営者協会会長、埼玉経済同友会代表幹事(2)、埼玉中小企業家同友会代表理事、株式会社埼玉りそな銀行社長、株式会社武蔵野銀行取締役頭取、公益社団法人埼玉中央青年会議所理事長、株式会社埼玉新聞社代表取締役社長、株式会社テレビ埼玉代表取締役社長、株式会社エフエムナックファイブ代表取締役社長、さいたま市文化協理理事長、公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団理事長、公益財団法人さいたま市文化振興事業団理事長、埼玉県県民生活部長、さいたま市教育長、さいたま市都市戦略本部長、さいたま市スポーツ文化局長、さいたま市経済局長

総合アドバイザー

加藤種男(公益社団法人企業メセナ協議会専務理事)

ディレクターチーム

ディレクター

芹沢高志(P3 art and environment 統括ディレクター)

プロジェクトディレクター

伊藤忍(P3 art and environment プロジェクトディレクター)

日沼禎子(女子美術大学准教授、ARTizanプログラムディレクター、アートNPOリンク理事)

三浦匡史(NPO法人都市づくりNPOさいたま理事・事務局長、地域生活デザイン代表)

水田紗弥子(株式会社Little Barrelキュレーター)

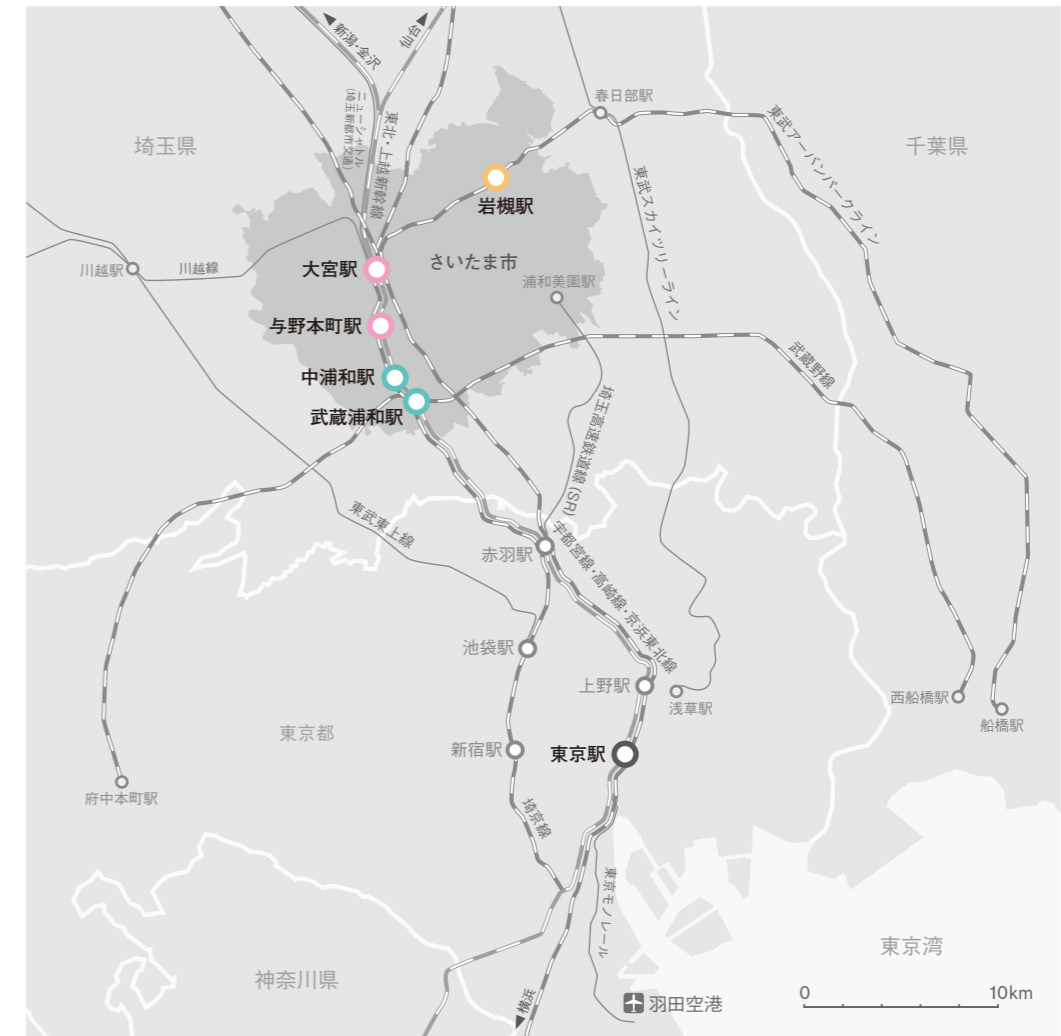
森真理子(一般社団法人torindo代表理事、アートNPOリンク理事)

ビジュアルディレクター

中島英樹(アートディレクター、グラフィックデザイナー)

(2016年3月25日現在)

アクセス



大宮駅まで

東京駅から約35分 JR 宇都宮線(高崎線、京浜東北線)利用

〈新幹線利用〉

東京駅から約25分 東北新幹線(上越新幹線、北陸新幹線)利用

仙台駅から約1時間10分 東北新幹線(秋田新幹線)利用

新潟駅から約1時間30分 上越新幹線利用

金沢駅から約2時間5分 北陸新幹線利用

武蔵浦和駅まで

東京駅から約30分 JR 宇都宮線(高崎線)・JR 埼京線利用(赤羽駅乗換)

大宮駅から約10分 JR 埼京線利用

岩槻駅まで

大宮駅から約10分 東武アーバンパークライン利用

お問い合わせ

さいたまトリエンナーレ実行委員会事務局(さいたま市役所 文化振興課 トリエンナーレ係)

〒330-9588 埼玉県さいたま市浦和区常盤六丁目4番4号 TEL 048-829-1225 FAX 048-829-1996

E-mail bunka-shinko@city.saitama.lg.jp http://saitamatriennale.jp